

食べることは、生きること。
それに欠かせない摂食嚥下。
超高齢化社会を迎えたなか、
中村さんたちの活躍に期待する。



伊藤隼也
が行く

Vol. 37

杏林大学医学部
附属病院看護部

ごはんを食べると みんな元気になる

伊藤隼也は今回、杏林大学医学部附属病院（東京都三鷹市）を訪問。摂食嚥下障害看護認定看護師として主に入院患者さんのアセスメントなどを実施する中村みゆきさんに、話を伺いました。

患者さんに嚥下テストを実施する中村さん。
飲み込み具合をしっかりと観察。

中村 13年目です。

伊藤 ベテラン看護師ですね。摂食嚥下の認定看護師の資格を取得したのは2011年だと聞いています。きっかけは何だったのでしょうか。

中村 2つあります。一つは、患者さんがごはんを食べると、元気になると感じたことだつたと思います。もう一つは、こここの病棟には外傷や脳腫瘍の患者さんが主に入院されています。とくに悪性腫瘍の患者がいる。もう一つは、この病棟には看護師になつて5、6年になります。看護師になつて5、6年目ぐらいのことだつたと思ひます。

伊藤 まさに、「食べることは生きること」ということです。

中村 はい。もう一つは、この病棟には外傷や脳腫瘍の患者さんが主に入院されています。とくに悪性腫瘍の患者がいる。もう一つは、こここの病棟には看護師になつて5、6年になります。看護師になつて5、6年目ぐらいのことだつたと思ひます。

伊藤 まさに、「食べることは生きること」ということです。

中村 祖母が脳梗塞になつたんです。住まいが遠方だつたこともあって、直接受けたお世話はできなかつたのですが、それで看護師になつたら脳外科に行こうと決めていました。さいわいなことに、専門学校を卒業してすぐに脳外科の病棟への配属が決まりました。

伊藤 いまは、看護師になつて何年目ですか？

者さんは、腫瘍の進行とともに意識レベルが下がり、ごはんが食べられなくなつて、最期を迎えることが多いんですね。そういう経過のなかで、口から食べる時間をできるだけ長くするお手伝いはできないか、摂食嚥下の知識があれば、安全にギリギリまで食べてもらうことができるんじやないかと思つたんです。

伊藤 最後まで口から食べられるといふのは、患者さんだけでなく、ご家族の気持ちを考えても、とても大切なことだと僕も思います。ところで、「ご飯を食べはじめると状態がよくなる」といふことがあります。でも、「ご飯を食べはじめると状態がよくなる」といふことについて、以前は漠然と捉えていたわけですが、専門的なことを学んだことで、より理解が深まりましたか？

伊藤 相乗効果ですね。食べられるようになると栄養状態がよくなるので、身体の耐久性も上がる。耐久性が上がればより食べられるようになります。

また、ものを食べるといろいろ神経系が働くので、脳外科でいうところの「意識レベルが少しずつ上がる」という状態になります。

どういう状態だったのか、説明してもらつてもいいですか？

中村 一人目は、外傷性の硬膜下血腫と脳挫傷が複合的にあって、機能的障害による嚥下障害がある患者さんです。今はとろみをつけた食事や飲みものをとっていますが、ときどきむせることがあるので、みてほしいという依頼を受けて実施しました。今日のアセスメントでは、むせはあるけれど、とろみの濃度によってはむせなかつたりもしていたので、嚥下機能の改善が、徐々に見られていると評価しました。

伊藤 以前は、どうだつたんですか？

中村 当初は経管栄養でした。

伊藤 今日のアセスメントでは、最初に痰を吸引されました。

PROFILE
杏林大学医学部附属病院看護部
摂食嚥下障害看護認定看護師
中村みゆきさん
2002年4月 杏林大学医学部付属病院入職
2011年7月 摂食嚥下障害看護認定看護師資格取得
現在、杏林大学医学部付属病院で副主任として脳神経外科・救急科・麻酔科病棟勤務

伊藤隼也
が行く
Vol. 37